

鯖江市教育委員会
鯖江市総合教育会議議事録

平成28年1月12日（火）

1 会議概要

- 日 時 平成28年1月12日(火) 午後 2時58分開会
午後 5時00分閉会
- 場 所 鯖江市役所4階第2委員会室
- 出席者
牧野 市長 福岡 委員長
二木 委員長職務代理者 蓑輪 委員
笹本 委員 辻川教育長
- 欠席者
なし
- 事務局
友永 事務部長 柴田 教育審議官
早苗 文化の館副館長 福岡 教育総務課長
矢部 生涯学習課長 浮山 文化課長兼まなべの館館長
菊野 スポーツ課長
- 書記
山田 教育総務課課長補佐 内山 教育総務課主事
- 議事日程
 - ① 開会の宣告 午後 2時58分開会
 - ② 協議(意見交換)
 - (1) ものづくりを核としたふるさと教育の推進について
 - (2) 家庭と地域の教育力及び社会力の向上について
 - (3) 学校におけるITの活用・普及について
 - (4) 幼児教育の充実について
 - ③ 閉会の宣告 午後 5時00分閉会

2 会議次第(発言概要)

1 開会

2 協議事項

<市長よりあいさつ>

鯖江市の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の中でも、次世代を引き継ぐ子供たちが鯖江に愛着を持って、そしてふるさとに自信と誇りを持ってくれるような育成に力を入れていきたいということで、いろいろな事業に取り組んでいただいている。

首都圏への人口流出超過で、地方は人口減少という大変厳しい状況の中、鯖江の場合、

現在、近隣市の産業が好況で求人が非常に多いということで増え続けているが、鯖江市の産業構造や雇用形態が変わったということは全くないので、決して楽観できる状況ではない。

これを何とか持続するためには、子供たちがこのふるさとに残ってくれる、そしてふるさとの産業の後継者になってくれる、そういう子供たちを育てたいということで、鯖江市の教育大綱の中でも、ものづくりのまちでのものづくり教育、ふるさと教育を大きな柱に掲げている。

とにかく地域ブランド、鯖江ブランドを発信して、子供たちが残ってくれる、あるいは首都圏へ行っても外国へ行っても帰ってきてくれるような新産業の創造にも力を入れていきたいということで、元気な産業に対しまして、ふるさと創生の先行型予算、また今回は新型交付金等でも、この事業の展開をさせていただきたいと思っている。

人づくりに関するいろいろな理念を大綱の中でも示しているが、皆様方に御協議いただきたい。

(1) ものづくりを核としたふるさと教育の推進について

<教育長から資料に基づき現状・方向性、今後の課題の説明>

【現状と方向性】 小学校では、生活科、社会科、総合学習で、鯖江市や自分たちの小学校区域のことを学ぶ、地場産業の体験学習などを行う。また、講演会を開いたり、地域の人を講師に招き、これまで功績のあった地域の人や地域の資源について話を聞いたり、活躍している地元の先輩の話を聞いたりという取り組みをしている。

中学校では、ものづくり教育の推進として、眼鏡のデザイン実習、ものづくり博への参加、職業体験活動などに取り組んでいる。こちらも、地元で活躍している社長や若者の話を学校で聞いて、これからの生き方、進路の決め方の参考にしている。

今年度の取り組みを、各小中学校で年間スケジュールと学年で体系的にまとめ、来年度から、それをもとに各学科に取り入れ、本格的に実施していく。

【課題】 講師や地元企業の社長などの人探しが学校だけでは難しく、交渉などのコーディネートが大変である。各学校にある地域・学校協議会などで取り組むか、もしくは校長・教頭が先頭に立つことも必要なのではないかと。今後、ものづくり教育をさらに進めていく上では、産業界と小中学校の先生方、そして市の商工政策課、教育委員会、こういう機関が集まって協議会的なものを設置して、ものづくり教育を進めていくことも必要であると考えている。

今の課題は、先生自身も鯖江市の産業の現状を知らないことが多く、子供と一緒に、先生にも学習してほしい。ものづくり博覧会のパンフレットを見て、事前学習や事後学習をし、理解をさらに深めると、より良い機会になるのではないかと。

あとは、職場体験で、ものづくりの企業が受け入れ先になるのが難しいという点。中小規模企業が多いことと、2日間も子供に体験させることが難しく、受け入れられる企

業が限られてきている。

<市長>

本当は鯖江のものづくりを見てほしいという切なる願いがあるが、職場体験の受入はほとんどサービス業で、眼鏡・漆器・繊維などの製造業はどうしても少ない。

<教育委員>

学生に鯖江をふるさとだと、良い場所だと覚えてもらうためには、職場体験学習ができなければ、会社の撮影をして、先端技術の紹介を学校で行い、鯖江にはこんなに良いもの・良い技術がある、こんなにすばらしい歴史があると知らせるべきだと思う。

業種別ではなく技術別で、眼鏡屋ではなくメッキ屋というふうに技術単位に物事を考えていくような教育、そういうものの専門家を育てていくべきだと思う。

小中学生に、福井県には、鯖江市には、こういう特色や他とは違う差別化されていることがたくさんあることを教えていかないと、Uターン、Iターンはないと思う。

<市長>

ものづくり博覧会は、事前学習や事後学習をしてくれるのなら、パンフレットを生徒全員に渡しても良いと思う。今年の場合は鯖江の197事業所が、何をやっているか、どういう特色があるか全部書いてある。

村田のロボット、シャルマンのラインアートや医療機器などの先端技術も、普段見ることはないが、全部ものづくり博なら見られる。ものづくり博をもっと活用してほしい。

<教育委員>

信用金庫がつくった福井県中の観光名所が全部書いてあるパンフレットを各信用金庫に送っている。そうしたら、去年1年間で多くの信金が旅行に来ている。やはり行動を起こせば起こすだけ、何か成果が出てくると思う。今まで常識だと思っていたものを常識でないというふうに考えないと、活性化は難しい。

それと一緒に、教育でも、鯖江市の良さをPRしないといけない。そういう意味で僕は先端技術の紹介は良いのではないかと思う。

<教育委員>

やはり学校と家庭と行政みんなが同じ方向を向いていかないと、成果はなかなか出ないと思う。一番身近な家庭で、眼鏡とか漆器とかいろいろなものづくりに関わっている家の方が、ものづくりについての会話をしていれば、魅力を伝えるのに、そんなすごい先生はいない。学校や市からももっと情報発信をして、鯖江市はこういう子供を育てていると保護者が理解すれば、家庭も同じ方向を向いていけるのではないか。

<市長>

昔は後を継いでくれないといけないと、みんなそう教えたが、今は勉強して外へ行けとしか言わない。そういったことも影響しているだろう。

<教育委員>

学校では、子供本人の希望ではなく、学力に合わせた高校・大学を選ばせて、最終的に帰ってこなくなっている気がする。だから、鯖江市の良い所をたくさん宣伝する必要がある。例えば、チタンの集積場を鯖江市に造るのであれば、興味のある人を日本全国から呼び込むという方針でやらないと、人口は増えたりしないし、鯖江のものづくりはあまり進まないのではないかな。

<市長>

親の教育を少しやり、後継ぎをする者の教育をもう少し何とかできないか。

<教育委員>

後継者の育成も重点的にしていかなないと、産業は衰退してしまう。

学校教育の中で先端技術とか歴史とか、そういう鯖江の良さを教え込んでいかなないと、今の学校教育だけのままでは、学力の順番で大学を出てきて、学力の順番で会社に入るとなってしまうのではないかなと思う。

<教育委員>

一度出ていっても、また戻ってくるという道を作ってあげると帰ってきやすい。

<教育委員>

会社経営者や医者などは、自信を持って後継ぎを期待するかもしれないが、普通一般の家庭では、なかなか自信を持って子供に道筋をつけたり、暗にそういう方向へ持っていこうとしたりすることは非常に難しいと思う。親にそれだけの自信がない。

<教育委員>

子供たちにふるさとの良さを分かってもらい、鯖江にいることを自分で決めたならば、一番良いと思う。「美わしの鯖江」という曲の3番に、眼鏡とか地場産業が出てくる。遠回しかもしれないが、中学校や小学校で月に1度の朝礼のときにでも歌っていくと、随分変わると思う。だから節目に歌うということはできないかなと思っている。

<教育委員>

歌うときに、スクリーンにもものづくりをしている現場や、先端技術の現場の写真を映していくと良いのではないかな。

<教育委員>

やはり、ふるさとを愛することも機会あるごとに教えていくということは必要なかもしれない。

<教育委員>

とにかく先端技術の紹介だけは、工夫してもらった方が良いと思う。

(2) 家庭と地域の教育力及び社会力の向上について

<教教育長から資料に基づき現状・方向性、今後の課題の説明>

【現状と方向性】学校教育では、家庭でのしつけや学校教育への理解を深めるために、家庭学習の手引を作成した。今年度は中学校編をまとめており、新年度には配布してい

きたい。あわせて、家庭教育啓発書の「はぐくみ」を年2回発行しており、新年度で50号ということで、特別号を発行して、家庭教育への理解をさらに深めていきたい。

公民館合宿通学事業については、地域の方と子供たちの交流の場として有意義なことであると思っているので、今後も理解を得ながら継続していきたい。青年団活動も少しずつ活発になってきているので、青年団の人たちに、合宿通学にも関わってもらえればと思っている。

青年団については、市の連合青年団60周年のときに、東部地区の青年団の方が、東陽中学校区の盆祭を復活できないかと考えているということだったので、復活させていただけのなら、応援していきたい。

子ども会活動については、指導してくださる方が非常に熱心に取り組んでいただいております。ジュニアリーダーも育ってきている。子ども会まつりも年々盛況になっているようで、子供の自主性を育てるという意味では大変有意義な機会なので、今後も応援していきたい。

スポーツ少年団については、近年、加入率が若干低下しているが、福井国体の開催を控えて、加入率を上げていきたい。最近、子供同士が学校を離れてから集まる場が少なくなったということから考えると、スポーツ少年団活動は、異学年の子供たちが集まって活動していくことで、子供たちのリーダーシップの育成や集団でのルールづくり、ルールや礼儀作法を学ぶことができ、子供たちの社会性の育成にも有効であると思うので、加入を促していきたい。

【課題】家庭における教育に無関心な保護者、教育のことは学校にお任せという保護者をどうやって巻き込んでいくかということが非常に難しい。講演会とか啓発誌を配布しても、本当に読んでほしい人になかなか読んでももらえない、来てほしい人に来てもらえない。特に今は、家庭で親が継げということと言わなくなった。それと、親が子供を叱ることも少なくなったと思うので、きちっと叱れる親であるよう、親学の講座も必要だと思う。

<教育委員>

男は仕事で、家庭は嫁に任せておけば良いという時代があったが、今の教育でも問題が出てきたというのは、結局その年代が作ってしまった。

今は会社がほとんどで地域でのつながりは弱くなってきている。やはり家庭から教育をしていかななくてはいけないということを最近思うようになった。朝飯とか夕飯は、一番子供とのコミュニケーションがとれる時間だが、今のサラリーマン家庭で朝飯と夕飯を一緒に食べる社員は少ない。そういう原点から直していかななくてはいけないだろう。

<市長>

地域力も必要だと思う。

<教育委員>

選挙があった時に、選挙権があるお子さんと一緒に来られている人もいるし、小さい子供と一緒に連れてきている家庭もあった。すごく良い教育をしているなど感じた。一緒に選挙に行くことで、良い姿を見せていると思うと同時に、両隣の方に声をかけてきてあげれば良かったと反省した。

あと、ラジオ体操では、もう少しみんなで共通理解をしながらやっていけば、しっかりと自分たちの力で町内の子供を育てようという意識になるのではないかと思った。

そういう点で地域力の大事さ、責任も感じた。

<市長>

地域力も家庭力も落ちている。学校はどうか。

<教育委員>

両親の交友関係が広い子供ほど、子供自体も交友関係が広い。そういう子供ほど、やはり社会性が優れている。

親の人間関係は、近所付き合いの多さにも関係があると思う。会社で人間関係がうまくいくか、いかないかは、そういった地域性もかなり影響しているのではないか。

<教育委員>

学校については、学力的には上がっていると思う。ただ、つながりとか触れ合いとかになってくると、希薄になっているという気はする。

<市長>

親が子供に、ふるさとに自信と誇りを持ってと言っても、親がふるさとに誇りも持っていなければ嘘になるし、後を継ぐようにと言わない人が増えた。これが家庭力の落ちた一番大きい原因なのではないかと思う。

<教育委員>

学力中心主義で、学力に合った学校、学力に合った職業を選択するようになっているが、僕は特色のある個性のある職業を選ぶ人間が出てこないといけないと思う。

<教育委員>

全国に比べれば、鯖江とか福井県の社会教育力はあると思っている。小中学校の学力検査や運動能力の好成績から、子供たちが安心して勉強や運動ができるということは、それだけ家庭が安定しているからだと思う。その成果から見ると、社会教育力はある。ただ、断トツに社会教育力をつけようと思うと、まだまだ伸び代があり、その部分について道筋を立てられたら、鯖江市の成績や運動能力もさらに上がると思っている。

<教育委員>

ある会社の営業に、強豪野球部員がたくさん入り、ものすごい積極性で、受注できようができまいが営業に行き、成績が上がり出した。積極性とかがあれば、学力以外でもまだまだ伸び代があるので、そういう人間に鯖江に残ってもらえると良い。

2040年の人口減少率は、鯖江は10%しかない。福井市・鯖江市・越前市の平均が16%ほど減少するが、全国平均くらい。ところが、他の市町を全部入れると、18.

9%ほどで、ものすごく人口が減っていく。県庁所在地はものすごく有利だし、その真横にある鯖江市も、まだまだ条件はいいと思っている。

(3) 学校におけるITの活用・普及について

＜教育長から資料に基づき現状・方向性、今後の課題の説明＞

【現状と方向性】今年までに市内の3中学校の普通教室全てにプロジェクター・スクリーンを配備、教員へのタブレット端末の貸与を済ませ、現在授業に活かしている。今後は、小学校の高学年にもタブレット端末や大型液晶テレビの配備を進めていきたい。

先生方のタブレット以外にも、子供たちが使うパソコン室にコンピューターが32台から40台ほど、各学校に配置してあるが、これがちょうどリース期間満了で、来年度更新時期を迎える。今後、子供たちの学習にどのような機種がいいか、デスクトップかノートかタブレット接続可能型の端末か、いろいろ研究しながら進めていきたい。

それから、イチゴジャムを活用したプログラミングのクラブ活動は、今年までに鯖江東小学校、吉川小学校、北中山小学校、鯖江中学校で取り組んでいただき、来年度はこれに加えて、小学校2校、中学校1校で新たに組み込むように進めていきたい。コンピューターの基本的なプログラムの原則、基礎知識を習得する、それから子供たちの考える力を育成していくということに取り組んでいきたい。

【課題】IT機器は非常に便利で重要なことではあるが、財政負担も非常に大きいものがあり、費用対効果も十分考慮していく必要がある。そして中学校は、タブレット端末の導入が終わったが、それに伴い、子供たちの理解が本当に深まったのか、授業が分かりやすくなって、子供たちの授業に対する関心が高まったのか、学力の向上につながっているのかということ客観的に検証していくことも今後必要だと思っている。

それから、先生方自体のIT活用の方法にも習得の差があるので、今後、うまく活用していらっしゃる先生の授業を参考にしながら、ほかの方にも研修として、良い授業例をどんどん見ていただき、活用していただくということも必要だと思う。

イチゴジャムのプログラミングのクラブ学習は、実施校が増えていくと、指導者が不足し、確保が難しくなるということが問題になってくるのではと考えている。

＜市長＞

県下でも鯖江市は、IT教育は進んでいるのか。

＜事務局＞

進んでいると思う。8割の配備率なのでタブレット端末配備が進んでいる。

小学校高学年を対象として今後配備予定だが、小学校は体験が基本なので、間接的なそういうものは、できるだけ学問体系がしっかりした高学年用と考えている。

＜市長＞

イチゴジャムのプログラミングは、教える先生がいらないということだが、鯖江中だけ

は部活でやるのか。

<事務局>

外部から講師に来ていただいて部活でやっている。先行して入っている鯖江東小や吉川小や北中山小は子供たちが育ってくるので、来年、再来年以降は、中学校ではその子供たちが中心になって、初めての子を教えることができると思う。

<市長>

イチゴジャムは、1年だけ教育して、使用した人に受け渡してしまうのか。

<事務局>

基本は1年だが、場合によっては貸与して、次々と引き継ぐということもある。

<市長>

今、Hana道場などには子供さんがよく来ている。ああいう所へ行くような指導はこれからやっていってもらえるのか。

<事務局>

ある。小学校は4年生から入るので、同じ子が続ければ4年～6年の3カ年は勉強できるが、人気が高いので、できるだけたくさんの子に配備したいと思っている。

<市長>

まだこれから検証だろうが、このことで少しは学力が上がるのだろうか。

<事務局>

興味づけを学校でさせるというのが一番の狙い。

現場には視聴覚の堪能な先生がまだまだおられるので、彼らを上手に配置していけばさらに進むと思う。

<教育委員>

タブレットを使って、試験問題を全部回答するとかも良いのではないか。

<事務局>

いずれそういうことにも着手しなくてはいけないかもしれない。

<教育委員>

子供にタブレットの端末を1台ずつ渡して、家に帰ってでも、もう一回学校とつながって、復習ができる取組みをしている市がある。

<市長>

佐賀の武雄市がやっている。ものすごく学力が上がったらしい。

<事務局>

そうなると1回でやめられない。ずっと更新、更新していくとなると、経常的に費用が要るようになり、その辺が難しいと思う。

<事務局>

タブレットを入れて、不登校生は3分の2になった。これはやはり、先生が面白いものをやっていて、分かりやすいのだと思う。100人だったのが、今は60、70名ぐ

らい。3年で減らすというのが大きな目標だった。

<市長>

それは大きな効果があった。

<事務局>

今年度で大きく減っているので、来年、その統計が出てくると思う。

<事務局>

頭の中で想像が難しい立体模型や立体図形とかを、社会科にしても臨場感あふれるものを視覚で確認できれば印象に残るので、生徒は面白いのだと思う。

<教育委員>

タブレットを導入したことによって、先生方の教材準備は、以前に比べると時間が短くて済むようになったのか、それとも時間がかかるようになったのか、どちらなのか。

<事務局>

タブレットの中に教科書が組み込まれており、教科書を開いて勉強しなければならないところを、タブレットでそのまま見ることができるので、非常に短縮はされている。

<教育委員>

徳島教育委員会のLINEを見ていると、高校生に対しての大学の説明とか、企業の人の思いとかを載せている。子供とコミュニケーションをとるための情報を、親に対して教育委員会からLINEなどで発信することもあっていいと思う。

<事務局>

今、ホームページがあまり活用されず、アクセスがない状態なので、まずはホームページにアクセスしてくれるようにしていきたい。

(4) 幼児教育の充実について

<教育長から資料に基づき現状・方向性、今後の課題の説明>

【現状と方向性】県でまとめた保幼小接続プロジェクトを踏まえて、幼稚園と学校との交流連携を密にして、子供たちが円滑に小学校に進学できるように、就学前教育の充実を図っている。これからも相互理解を深めながら進めていきたい。この県のプロジェクトをまとめたときには、ゆたかこども園と豊小学校がモデル校として進めた経緯もあり、こちらは幼小連携が非常にとれていると、県でも評価が高かった。

公立幼稚園については、現在、ゆたかこども園を除いて6園あるが、だんだん入園児童数が減少しており、平成27年12月1日現在では6園で302人、来年の入園希望者が今のところ268人ということで、おおむね1割減の状況である。平成18年は390人在籍していたので、130人ほど減少している。原因としては、子供の数が減っていることもあると思うが、やはり保育園へ行かれている方が多いと思う。中でも、片上幼稚園が少なく、来年の3歳児の入園希望が今のところ4人。4人だと集団での学級も成り立ちにくくなるので、4歳児との年齢をまたがった混合保育もこれから考えて

いって、ある程度の集団を確保していく必要があるだろうと思っている。

それから、片上幼稚園と北中山幼稚園には今のところ保育所がなく、来年度ではそちらで一時保育を充実させるということで、夏季休業期間も預かり保育を実施していきたいと、児童福祉課とも協議をしている。

あと、幼保一体化ということで、認定こども園への移行についても児童福祉課と協議を進めており、鯖江地区の鯖江と王山、進徳と早稲田、この辺の認定こども園化も研究をしているところである。

【課題】小学校併設の幼稚園は、小学校へスムーズに上がっていくことを考えると、校長先生が園長先生を兼ねているので、小学校へ上がったときに、安心して入学できるというメリットがある。そう考えると、なるべくなら存続させていきたいと思っているが、集団の中で子供たちを育てていくということも考えると、ある程度の規模が必要になってくると思うので、子供が減ってくれば、異年齢の学級編制も考えていく必要があるのかもしれない。

認定こども園を進めていく上では、全体的に子供が減っていくことも考えると、民間保育所との調整も十分考慮して進めていく必要があると思っている。

<教育委員>

知・徳・体と言うが、個人としては体・徳・知と思っている。

幼児の段階から道徳的なことをしていかなきゃいけないなと考えるので、幼児教育を協議テーマに挙げていることをすばらしいと思う。

学力という点においても、幼稚園や保育所の朝の遊びの時間は、先生方が子供にこうあってほしいという願いのもとで環境を整えている。そこをどのようにするかによって、子供の学力に必要な想像力や思考力がものすごく育っていく時間だと思っている。だから、こういうふうに挙げてあると、民間・公立の幼稚園、保育所全ての先生方の意識も変わるかもしれないし、そこを大事にしていけば、鯖江の学力はさらに良くなると思う。

もう一つ、幼少連携には温度差があるようなので、もっとみんなが同じ認識を持っていければ、ものすごく成果が出ると思う。小学校の先生の中には、幼稚園の先生がどんなことをしているかを知らず、ただ遊ばせているだけだと思っている方もいる。その中で、夏休みに小学校の先生が幼稚園、保育所へ行って体験することにより、子供たちの現状をすごく勉強できたと、小学校の先生からも聞いているので、それぞれの教育の場でどんなことをしているかということ認識の上でも、連携はとても大事だと思う。幼児教育の中で、ここまでできているということを小学校の先生が知っていることによって、1年生で無駄なこともする必要がないし、さらにレベルアップも望めると思う。

それと、公立、私立、幼稚園、保育所の壁は、まだすごく大きいと思うので、対応していく必要があると感じる。3歳以上になったら、お預かりするだけでなく、きちんと道徳面、いわゆる見えない力を育てていくという認識できちんと育てていき、小学校

に上げるということを考えていくと、保育所、幼稚園の隔たりをなくし、せめて公立だけでも3歳以上は先生たちが一緒につながって、鯖江の子供は温度差のない環境の中で育てていくことが大事だと思う。壁が厚いということは非常に危惧している。

<事務局>

先生の意識改革も必要だと思うのと、ゆたかこども園がどうしてうまくいったかというところ、幼稚園でもない保育所でもない、第三者的な形で園長先生に行っていたことにより、わりとスムーズにいったという気はする。例えば、幼稚園の園長先生がこども園の園長先生になると、どうしても幼稚園に考え方が行ってしまうこともあるので、そういうところの意識の改革や、職員、先生方の意識改革も必要になってくるのではないかと思う。

<教育委員>

北中山と片上の、夏休みに一時預かりということがあったが、あちらは一時預かりをするのに、こども園の短時部は一時預かりをしないということで、不公平という声もあるので、きちんと説明した方が納得すると思う。

<事務局>

片上も北中山も大体6割ぐらいが希望されているが、保護者の声として、せめて4時半ぐらいまで預かってもらえれば、パートにもう少しきちっと出ることができるというお話もあり、ほかの開設していない園長先生方もわりと積極的である。こども園への移行期として、こういったことが必要ということはある。

<市長>

認定こども園の方向には進めていかななくてはいけないだろう。民間保育園も助成が変わったので、今はものすごく賛成している。そういう方向にだんだん行きつつある。

<教育委員>

長期休業中に7時間預かるときの危機管理は大丈夫か。

<事務局>

子供を見る保育士と、学校は必ず日直がいるので、日直が施設面の管理、安全面を見るということで、今考えているが、まだ協議しなくてはけないことはある。

<市長>

管理という面では、神明と河和田の学童保育は、先生方の理解は得ることができたか。

<事務局>

整備中だが、学校でやることで少しでも学童保育の満杯状態が緩和できるだろうということで、神明は2階の図書室も一緒に使用し、河和田は体育館横のミーティングルームを使用することを御理解いただいている。

<市長>

あと、子ども園を整備することに関しては、保護者の理解を得ることが難しいだろう。何とか保護者会に理解を求めて、青写真を描かないと話ができない。

<事務局>

公立の幼稚園と保育園を持っている地区は、わりと進めやすい。
公設民営みたいな形であれば、民間も引き受けると思う。

3 閉会